

~~~~~  
論 説  
~~~~~

フランコ独裁体制初期における
アクション・カトリカ青年部
——マドリード, コルプス・クリスティ教区の
機関誌『セントロ』からみる組織再生の試み——

渡 邊 千 秋*

はじめに

1939年4月1日にフランコによる内戦終結宣言が出されると¹⁾, カトリック教会は、内戦中に被害をうけた建造物の再建はもちろん、戦争によって失われた教会運営にあたる聖職者や「よき平信徒」をあらためて確保しなければならないという現実と直面した。

内戦の最終局面まで共和国陣営の支配領域であったマドリードでは、カトリック信徒の共同体としての教区教会はその機能をほぼ停止していた²⁾。反教権主義的暴力によって教区教会が破壊されたからでもあるが、破壊を免れた教区教会であっても共和国陣営によって接収され、さまざまな政治的・社会的用途のために使用された例が数多くある。3年弱にわたって宗教的実践の場であるこ

* 青山学院大学国際政治経済学部教授

- 1) Luis ESPAÑOL BOUCHÉ: *Madrid 1939. Del golpe de Casado al final de la guerra civil*, Madrid, Almena Ediciones, 2003, pp. 68–70.
- 2) 共和国陣営内では、1937年夏以降、バスク・ナショナリストであり「よき平信徒」としても知られる法務大臣イルホが、共和国陣営の支配領域におけるカトリックの宗教実践を復活させることを宣言していた。しかし実際には、戦況によりバスク地方からバルセロナに移動したバスク・ナショナリストたちへの宗教実践が私的なレベルのものとして許される、といった非常に限定された範囲に留まった。Gonzalo REDONDO GÁLVEZ: *Historia de la Iglesia en España 1931–1939. Tomo II. La guerra civil (1936–1939)*, Madrid, Rialp, pp. 331–332.

とを許されなかった教区教会では、戦争終結後、共和国陣営の宗教政策のもとで断絶した組織運営を通常にもどすことが緊急の課題となった。

内戦中のフランコ陣営では、自分たちの勝利におわたった記念すべき戦闘が終結するたび、神のご加護に感謝しミサを行ったといわれる。また戦後も、カトリックのプリズムを通して全てが見られる世界観のなかで、カトリック教会の再生は、着々と進められたと考えられがちである。しかしながら、現実には、フランコ独裁体制を支持したカトリック教会、そして信徒のあいだでは、体制に対してとる立場には差異が生じていた。たとえば、アクション・カトリカの運動体のなかで実質的には「職業的」シンジケートだったカトリック学生連盟やカトリック全国農業連盟などは、一部のミリタンや聖職者の反対にもかかわらず、体制により解散させられ、「伝統主義と JONS のスペイン・ファランヘ」(以下「統一ファランヘ党」と略記)のなかに組み込まれた。そしてこのような動向を政治による教会への介入ととらえ、体制の方針に疑念を抱くカトリック信徒が生まれることになった。

このように、実際には、物質的にも人的にも心理的にも分断されていく信仰の共同体をどうまとめるのかが、教会を再興するうえでの大きな課題となっていたと思われる。では、当時の「よき平信徒」はどのように信仰の共同体の再建にかかわろうとしたのだろうか。

本稿では、マドリードにおけるアクション・カトリカ青年部(以下「青年部」と略記)の教区セントロのひとつに目を向けようと思う。具体的には、コルプス・クリスティ教区教会での例をとりあげ、この教区で作られた「青年部」の教区セントロの活動を通して戦後、組織はどのように再生されようとしたのか、その「草の根」の教区レベルから構築することを目的とする。

1. 復興期のマドリードにおけるコルプス・クリスティ教区教会

共和国支配の下にあった内戦期のマドリードでは、共和国陣営の脱宗教化政策によりカトリック教会はその機能を停止させられた。市内の教区教会の多くは、共和国陣営側に接収されて、倉庫や兵営などとして使用された。たとえば、

焼き討ちにあったサン・アンドレス教会や、銃弾をうけたサン・ヒネス教会など³⁾、マドリード市中心部の教会建造物に関する損壊の被害報告が多数存在する⁴⁾。しかし、共和国陣営による破壊行為に起因しない教会建造物の破壊が起きていたことを忘れてはならない。実は、フランコ陣営(反乱軍側)が市街地に対しておこなった空爆によって破壊された教会建造物も数多く存在する。コルプス・クリスティ教区教会もその一例である。教区運営にあっていたクラレチアン宣教会の本部が置かれていたアルゲエリエス地区ブエン・スセソ通り周辺は、激しい空爆の被害を被った地区のひとつであった⁵⁾。この地区でのクラレチアン宣教会の活動は、1905年にブエン・スセソ通りに修道院を建立したことに遡る。1908年10月には教会堂が献堂され、会本部も、旧市街地中心部のサン・イシドロ教会近くのコレヒアータ通りからブエン・スセソ通りへと移転した。これにより、クラレチアン宣教会は、19世紀半ばに開発がはじまった新市街地への宣教司牧活動を開始し、実践を積んでいったのである⁶⁾。

内戦後、カトリック教会は、自らの再建を急がねばならなかった。マドリード司教区では、再建を担当した司教代理カシミロ・モルシーリョの尽力で、1939年7月から9月にかけて11の教区教会がつくられた。このなかに、本稿であつかうコルプス・クリスティ教区教会も含まれている⁷⁾。

3) Francisco José MORENO MARTÍN: “La ciudad herida: destrucción y protección del patrimonio inmueble durante el asedio de Madrid”, Guzmano GÓMEZ BRAVO: *Asedio. Historia de Madrid en la guerra civil 1936-1939*, Madrid, Ediciones Complutense, 2018, pp. 588-590.

4) 1936年7月20日の時点で、50ほどの教会が火災にあったとされる。José Javier ESPARZA: *El terror rojo en España*, Barcelona, Àltera, 2007, p. 89.

5) Olivia MUÑOZ-ROJAS: *Ashes and Granite. Destruction and Reconstruction in the Spanish Civil War and its Aftermath*, Eastbourne, Sussex Academic Press, 2011, p. 52. 建造物に対する爆撃の影響力を全壊、半壊などレベル別に記録した改修・再建・健全化委員会の地域区画図が現存する。

6) Parroquia de la Inmaculada Corazón de María: “Historia”. 2008年12月2日アップロードとされている。(http://www.cormariaferraz.es/Historia,4) なお、本稿で用いる全URLに関して、その最終確認日は2019年2月5日である。

7) José Luis ALFAYA CAMACHO: *Como un río de fuego. Madrid, 1936*, Madrid, Ediciones Internacionales Universitarias, 1998 (2ed.), p. 280.

教区教会の再建とともに「青年部」教区セントロの再建も進められようとした。しかし、その過程には、混乱と困難とがつきまとった。1943年に発行された教会ガイドブックでは、「青年部」のコルプス・クリスティ教区セントロは、ビクトル・プラデラ通り44番に所在したことが記録されている⁸⁾。他方、1940年代の日報紙ABCに掲載された、追悼ミサの告知にでてくるコルプス・クリスティ教区教会の住所をみると、「コルプス・クリスティ教区教会、メンディサバル通り71⁹⁾」「コルプス・クリスティ教区教会、メンディサバル通り73¹⁰⁾」「コルプス・クリスティ教区教会(コラソン・デ・マリア)¹¹⁾」「コルプス・クリスティ教区教会(プエン・スセソ教会)¹²⁾」など、住所と教区教会の名称が時間を追って変化していることがわかる。物理的再建の過程にあるため、人々の混乱を招かないよう、()のなかにわざわざ追加情報を示さなければならぬ教区教会であったことが理解できる。

クラレチアン宣教会は、1945年には、マリアの聖心の聖域を公的な資金を得て再建することを独裁政権へ願い出て、受諾された。その結果、1952年には、プエン・スセソ通りから1ブロックほど離れた、フェラス通りとウルキホ侯爵

8) Junta Técnica Nacional de la Acción Católica Española: *Guía de la Iglesia y de la Acción Católica Española*, Madrid, Secretariado de Publicaciones, 1943, p. 727. ビクトル・プラデラ通りはフランコ独裁期に以前のメンディサバル通りにつけられた名称である。

9) “Esquela de Cipriano Novillo y Novillo”, *ABC*, 27 mayo 1942, p. 18. Recuperado de Internet. (<http://hemeroteca.abc.es/nav/Navigate.exe/hemeroteca/madrid/abc/1942/05/27/018.html>); “Esquela de José Navarro Martínez”, *ABC*, 22 noviembre 1945, p. 31. (<http://hemeroteca.abc.es/nav/Navigate.exe/hemeroteca/madrid/abc/1945/11/22/031.html>)

10) “Esquela de José Navarro Córdoba y Enrique Navarro Córdoba”, *ABC*, 15 diciembre 1942, p. 21. Recuperado de Internet. (<http://hemeroteca.abc.es/nav/Navigate.exe/hemeroteca/madrid/abc/1942/12/15/021.html>)

11) “Esquela de Joaquina Taracena Ispizúa”, *ABC*, 28 noviembre 1943, p. 46. Recuperado de Internet. (<http://hemeroteca.abc.es/nav/Navigate.exe/hemeroteca/madrid/abc/1943/11/28/046.html>)

12) “Esquela de Ramón de Pando y Armand”, *ABC*, 12 agosto 1948, p. 18. Recuperado de Internet. (<http://hemeroteca.abc.es/nav/Navigate.exe/hemeroteca/madrid/abc/1948/08/12/018.html>)

通りの交差する場所に修道院と聖域を再開し、これが、現在のコラソン・デ・マリア教区教会となった¹³⁾。その後コルプス・クリスティ教区教会の信徒は近隣の教区教会へと回収されていった¹⁴⁾。

マドリードの教区教会では聖職者はもとより「よき平信徒」の多くを内戦によって失っており、戦後は、その喪失を考慮したうえでの組織再編を余儀なくされた。クラレチアン宣教会の管理下にあったコルプス・クリスティ教区教会もその例外ではなかった。窮乏状態のなかで、必然的に取り組む事柄の優先順位が定められていく復興の過程にあって、果たして、「青年部」のコルプス・クリスティ教区セントロは、自分たちの居場所を教区のなかでみつづけることができたのだろうか¹⁴⁾。

2. コルプス・クリスティ教区セントロ機関誌『セントロ』について

教区内における「青年部」の活動を知る資料の1つに、機関誌がある。「青年部」コルプス・クリスティ教区セントロは、少なくとも1942年1月から1944年6月まで、不規則ではあるが、機関誌『セントロ (*Centro*)¹⁵⁾』を発行していた。本稿では、マドリード雑誌・新聞文書館が所蔵する第1号から第8号にあたる1942年1月から1944年6月分の機関誌を使用する¹⁶⁾。

機関誌『セントロ』第1号は、1942年1月24日土曜日にマドリードで発行された。価格は1部10センチモであった。全体を通じてページ番号の記載

13) Parroquia de la Inmaculada Corazón de María, loc.cit.

14) なお、2019年1月現在、アルグエリエス地区にはコルプス・クリスティという名称の教区は存在しない。1960年代初めには既に存在していなかったことが文献上確認できる。Rafael RAMÓN SAIZ: *Madrid-Alcalá, una diócesis en construcción: Exposición sobre las parroquias creadas en la diócesis de Madrid desde 1961 u 1982*, Madrid, Servicio Editorial, 1982.

15) 正式なタイトルは *Centro. Boletín Informativo de la Juventud de Acción Católica del Inmaculado Corazón de María y Beato Padre Claret. Parroquia del Corpus Christi*. 本稿では以下、*Centro* と略記する。

16) マドリード雑誌・新聞文書館の所蔵分では、第3号が欠号である。発行に関するデータは次の表を参照されたい。

はない¹⁷⁾。原稿はタイプで打たれた文字のままであり、また雑誌名のロゴが手書きであることから、謄写版印刷機を使用していたものと推察される。また、第2号では、同様の印刷方法スタイルのまま、ロゴのデザインが変更されている。これは、ロゴ自体が計画的な使用を目指してデザインされたものではなかったことを物語っている。第4号以降第7号までは活字が組まれた活版印刷であり、印刷所に印刷を依頼したのが一目瞭然である。しかし、第8号になると、再びタイプで打たれた形のまま発行されるようになった。この理由について『セントロ』は次のように述べる。

我々の機関誌の新しい時代だ。本号から月刊となる予定である。謄写版印刷機と発行に不可欠な全ての部品はそろった。ただひとつたりないもの、それが君たちの協力である。

まさにこの6月、我々の『セントロ』がみなの連合のための結び目となるに違いない、そして我々一人ひとりが海や山などより遠く出かけていくために、通常の住居を離れる。

しかし『セントロ』は、君たちの論考や、印象や逸話、君たちの使徒的な活動を載せて君たちの行くところまで届かなくてはならない。

なぜならば『セントロ』はみなの連合の結び目であって、宣教の代表者や指導部の誰かのために書かれたものではないからだ。『セントロ』は皆のものであろうとしている。

がんばって、働こう¹⁸⁾。

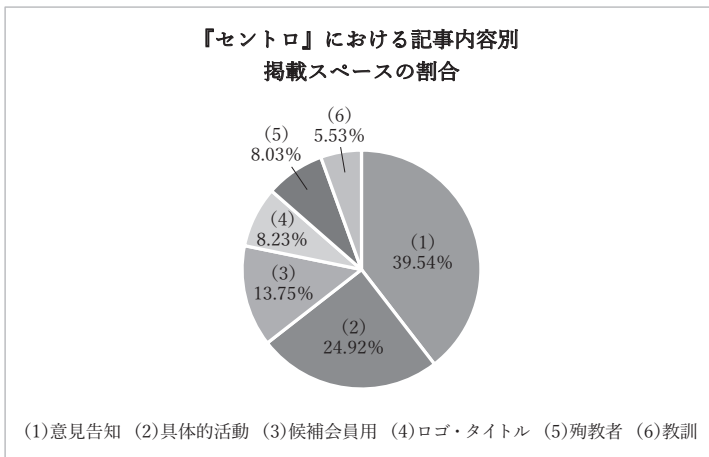
号数	発行日	印刷形態	ページ数
1	1942年01月24日	手書き・タイプ打ち	4
2	1942年01月31日	手書き・タイプ打ち	4
3	蔵書欠号のため不明		
4	1943年01月	活版印刷	4
5	1943年05月	活版印刷	4
6	1943年11月	活版印刷	4
7	1944年05月	活版印刷	4
8	1944年06月	手書き・タイプ打ち	4

17) 第1号のみならず、どの号にもページの記載はみられない。

18) “Colaboración”, *Centro*, núm. 8, junio 1944.

しかし、この8号をもって、マドリード雑誌・新聞文書館での『セントロ』の足取りは途絶えている。

参照したどの号にも、発行者や印刷所の記載はなく、また発行場所としてはマドリードと記されるのみで、コルプス・クリスティ教区教会の所在地の記載も見られない。とはいえ、時に会員の神学校への入学や結婚に関する個人的かつ具体的なニュースが掲載されていることをみれば¹⁹⁾、教区セントロに属する会員を主たる読者と規定した、地域限定の出版物であったことに間違いはあるまい。記事の内容を大まかに分類すると、(1) 執行部の意見表明・告知、(2) セントロの具体的な活動、(3) 候補会員むけ記事、(4) ロゴやタイトル・デザイン、(5) セントロ出身の「殉教者」人物伝、(6) 宗教的教訓話、に分けることができた。それぞれの分類項目が各号で占めるスペースの割合をグラフにすると、以下のようなになる²⁰⁾。



また、発行に関しては、1938年の出版法に基づく、独裁体制による検閲の可能性を考慮する必要がある。全ての出版物が体制による検閲の対象になったわ

19) たとえば以下の記事を参照せよ。“Noticias”, *Centro*, núm. 5, mayo 1943.

20) 今回は「スペース」ベースで数値化しているが、「単語数」ベースで言説を数値化する場合には構成の割合に変動が出る可能性を残す。

けであるが²¹⁾、その後、カトリック教会の典礼や既存のラテン語でかかれたテクストなどの出版物は、1944年3月の回状により、体制による検閲を免れることとなった²²⁾。また、前述した回状以前に「青年部」コルプス・クリスティ教区セントロ機関誌『セントロ』の発行は始まっていたが、紙面には体制側の検閲に関しても、教会ヒエラルキーによる検閲を受けたとする記述に関しても発見できない。

一般的に、教区教会セントロの機関誌には、指導する聖職者が執筆した記事が掲載されることが多いのだが、『セントロ』においては、聖職者顧問の署名記事は参照したなかでただ1度の掲載に留まる。また、短い教訓譚のようなものはあっても、聖書の解説など、ドグマに関する記事はほぼ見られない²³⁾。

教区セントロ内では、出版代表と候補会員委員の2名が機関誌発行の責任者となっていた²⁴⁾。編集責任が2系統に分かれていることから、布教宣伝活動という非常に重要である部門で、情報の一元的管理がなされていなかったことが伺える。また、責任者を2人任命しなければならなかったこと自体が、正会員と正会員になる以前の17才以下の男子を対象とした候補会員とのあいだでの世代間ギャップによる差異があったことを示唆している。

3. 機関誌『セントロ』から読みとる教区セントロの歩み

マドリード司教区内のコルプス・クリスティ教区では、1934年5月にクラレチアン宣教会修道士、ゴリチョ神父の指導の下に集った青年たちによって青年

21) 教会関連団体が発行する日刊紙や雑誌への検閲は緩やかであったとされる。Alfonso LAZO DÍAZ: *La Iglesia, la Falange y el fascismo. Un estudio sobre la prensa española de posguerra*, Sevilla, Secretariado de Publicaciones de la Universidad de Sevilla, 1998, p. 20.

22) Justino SÍNOVA: *La censura de la prensa durante el franquismo*, Barcelona, Debolsillo, 2006, p. 115.

23) たとえば内戦以前にマドリードのサンタ・クルス教区セントロが発行していた機関誌『あけぼの (Albores)』では、聖書の解説が掲載されるのが常であったのとは対照的である。

24) “Noticias”, *Centro*, núm. 1, 24 enero 1942.

部の教区セントロが創設された²⁵⁾。この当時ゴリチョ神父は、ブエン・スセソ通りにあった同会の本部で、青年層に対する司牧活動を行った²⁶⁾。創立時には、まず教区セントロ指導評議会がつくられ、ゴリチョ神父のミサを中心的に補助していた「よき平信徒」、ガルシア・パブロス²⁷⁾が初任教区セントロ長に任命された。ゴリチョ神父の周辺に集った青年たちは、主の昇天の祝日を教区セントロ初の宗教行事、聖体拝領ミサとして祝った。以降、教区セントロは、クラレチアン宣教会からセントロを運営するための場所はもちろん、椅子や机といった設備品の提供をうけ、活動を拡大する²⁸⁾。彼らの活動は、「青年部」のマドリード教区評議会をはじめ全国評議会でも評判をえた。結果として、ガルシア・パブロスは全国指導組織での活動を展開するために教区セントロを離れた。続いて第2任教区セントロ長となったゴンサレス・バレラは、正会員は当然のことながら、候補会員の獲得にも尽力し、会員全体の宗教的学び、チャリティ活動への積極的参加、カテケシスなどを進めるとともに、文化的活動のため、図書の整備をおこない、また会員がスポーツや合唱に励むことを奨励した²⁹⁾。

しかし、このような教区セントロの活動はスペイン内戦で頓挫した。中心的に活動を担っていた会員も多く亡くなり、セントロは大きなダメージを受けた³⁰⁾。そして、内戦を生き残ったものは、先に逝った自分たちの同志を悼み、

25) Antonio GARICANO: “Días memorables”, *Centro*, núm. 7, Mayo 1944. なお前述したスペイン・アクション・カトリカに関するガイドブックでは教区セントロ創立は「1933年」と記されているが、本稿では機関誌『セントロ』の記述を尊重する。

26) Jesús BERMEJO JIMÉNEZ, CMF: “Juan María Gorricho Ramírez García”, DB-e, Real Academia de la Historia de España. (<http://dbe.rah.es/biografias/35367/juan-maria-gorricho-ramirez-garcia>.)

27) ガルシア・パブロスは、16歳でコルプス・クリステイ教区セントロ設立に大きく貢献した。内戦勃発時にはサンタンデルで共和国陣営側に逮捕されたが、フランコ陣営側へ逃亡。志願兵としてフランコ陣営に加わった。内戦後は、アパリシの後任として、1941年にアクション・カトリカ青年部の全国会長に選出された人物である。Junta Técnica Nacional de la Acción Católica Española: *op. cit.*, p. 426.

28) *Centro*, Antonio GARICANO: “Días memorables”, núm. 7, mayo 1944.

29) *Ibid.*

30) たとえば、ギハーロによるマドリードの教会に対する宗教迫害に関する研究では、マドリードのカルセル・モデロでの1936年11月7日におきた連れ出し殺害がとりあげられ、教区セントロメンバーとしてのホセ・ルイス・ロドリゲス・デ・ラ・フ

戦後は彼らの内なる死者の追悼を繰り返すことになるのである。

くわえて、指導にあっていたクラレチアン宣教会が内戦中に共和国陣営によって受けた人的被害は、全国的にみると、他のどの修道会が受けたものよりも大きかったことにも留意する必要があるだろう³¹⁾。コルプス・クリスティ教区セントロの場合、第二共和政期にこのセントロを指導していたゴリチョ神父は、内戦を生き延び、戦後は教区セントロの指導者に復帰した。その意味では教区セントロの精神的支柱には一定の継続性があったと考えることはできる。しかしながら、宣教会が被った人的喪失が、同会が「青年部」を通じて展開しようとした計画的司牧活動に大きな影響を与えたことは間違いない。

とはいえ、教区セントロの「復興」を目指す試みは、1939年にマドリードが内戦の終結をみたのち、クラレチアン宣教会の指導の下に再び集った青年らによって開始された。はじめのうち、彼らは、ガリレオ通りのクラレチアン宣教会レジデンスの一角でミーティングをもち、その後、ヤコブ騎士団修道会(Orden de las Comendadoras)教会の教会参事会室や聖具室などを臨時に借り受けながら、活動を継続した³²⁾。会員たちはクラレチアン宣教会が運営する「マリアの聖心」聖域の再建と、その新たな場所で活動を再開できることを待ち望んでいた。しかし先述したとおり、「聖域」再建の実現に時間を要したことは、教区セントロの活動にもネガティブな影響を及ぼしたと考えられる。

4. 『セントロ』から読む教区セントロの活動

コルプス・クリスティ教区セントロは、マドリード司教区内の教区セントロとしては中規模なものであり、先述した1943年発行の教会ガイドブックによ

ロール・トレスの名前が挙がっている。José Francisco GUIJARRO GARCÍA: *Persecución religiosa y la guerra civil. La Iglesia en Madrid, 1936-1939*, Madrid, La Esfera de los Libros, 2006, p. 503.

31) T TORRES: “Claretianos”, Quintín ALDEA VAQUERO, Tomás MARTIN MARTÍNEZ, José VIVES GATELL (eds.): *Diccionario de Historia Eclesiástica de España*, I, Madrid, Instituto Enrique Flórez, Consejo Superior de Investigaciones Científicas, 1972, p. 432.

32) “Al terminar la guerra”, *Centro*, núm. 7, mayo 1944.

れば、正会員 54 名、候補会員 25 名を数えたと記録されている³³⁾。

信仰面では、聖職者顧問が会員の精神的・霊的指導にあっていた。会の諸活動を計画・実践にうつすのは正会員の中でも秀でた者から構成される執行部であり、その役職は、当初は、セントロ長、副セントロ長、書記、会計、研究委員、候補会員委員、人格形成委員、スラム街カテケシス代表、ミッション代表、からなっていた³⁴⁾。のち補助執行部が置かれ、副書記、副会計にくわえて図書、カテケシス、労働者、旗手担当、というように役割分担が細分化された³⁵⁾。

会員の全人的人格形成を行うことを念頭に、執行部が中心となって行事を計画し、研究サークルを運営するという点では、第二共和政期にとられた方法と類似している。会員に教区セントロの活動への参加を促すこと、また新たな会員獲得を目指すことを念頭に、執行部は、できる範囲でさまざまな行事を実施した。

教区セントロの日常的な活動としては、土曜に定期的に研究サークルを開催すること、集団でロザリオの祈りを唱えること、サルヴェ・レジーナをうたうこと、ミサに出席すること、などがあげられる³⁶⁾。また、セントロの外部の人々との協力も模索し、教区でのボランティア活動にも参加した。クラレチアン宣教会の求めに応じて、使用済み切手の収集に協力した³⁷⁾。

教区セントロが祝う行事の多くは、教会暦にしたがって計画された。たとえば、クリスマスの時期には、クリスマスをテーマにした物語や歌のコンクールを開催し、優秀な作品には賞が与えられた³⁸⁾。1941 年においては、物語コンクール第一位作品は「義務と犠牲³⁹⁾」、1942 年においては「地のパン⁴⁰⁾」とい

33) Junta Técnica Nacional de la Acción Católica Española: *op. cit.*, p. 727.

34) “Noticias”, *Centro*, núm. 1, 24 enero 1942.

35) “Noticias”, *Centro*, núm. 6, noviembre 1943.

36) “Calendario”, *Centro*, núm. 1, 24 enero 1942.

37) “Filatelia”, *Centro*, núm. 2, 31 enero 1942.

38) “Resultados de nuestros concursos de Navidad”, *Centro*, núm. 4, enero 1943.

39) José MORETE ZAPATERO: “Deber y sacrificio”, *Centro*, núm. 1, 24 enero 1942.
一部分ではあるが、受賞作品本文が掲載されている。

40) “Resultados de nuestros concursos de Navidad”, *Centro*, núm. 4, enero 1943.

うタイトルであった。この2年とも、一位の受賞者は副セントロ長のモラテ・サパテロであることから、こういった文化的活動を展開するのは少数の正会員に集中していた可能性を物語っている。

クリスマスの時期に恵まれない子どもたちを対象として贈り物を配ることも行っている。1941年の年末には、サン・アントニオ・デ・フロリダ地区のスラム街でカテケシスを行い、参加した160名の子どもたちに甘いお菓子を配った⁴¹⁾。また、1942年12月27日には、スラム街の子どもたちへ昼食を届け、年明けの1943年1月6日にはカテケシスを開催した旨が報告されている⁴²⁾。

また、たとえば、マドリード北西部のペニャ・グランデ地区⁴³⁾における小さな演劇公演を行うとともに、スラム街の貧困者への食事提供などの慈善活動を展開しようとした⁴⁴⁾。活動規模として大きいとはいえないまでも、できる範囲で積極的に、社会奉仕活動を展開しようとしていたといえよう。

5. 候補会員へのアプローチ

候補会員とは、正式な会員になる前のいわば「見習い期間」にある会員のことで、教区セントロの存続のためには欠くことのできない存在であった⁴⁵⁾。正会員のなかからは、候補会員の世話役として教区セントロの幹部が候補会員委員として配置されていた。候補会員獲得に力をいれ、彼らを正会員に育成しようとして、教区セントロはそのためのインストラクターを養成するシステムをつくることとした。また候補会員の年齢層を考えると、一元的な管理をするの

41) “Parte de guerra”, *Centro*, núm. 1, 24 enero 1942. スラム街カテケシス代表ラファエル・オルニエリヨもしくはは人格形成委員ホセ・モラテとコンタクトを取るよう呼びかけている。

42) “Campana de Navidad”, *Centro*, núm. 4, enero 1943. なお、このカテケシス実施にあたっては男女両方の青年層が協力していることがわかる。

43) ペニャ・グランデは、内戦後の住宅不足問題が深刻だったにもかかわらず、新たな建築が着手されないマドリードのなかでも、都市計画上、一刻も早く状況を改善すべき地区であった。Carlos SAMBRICIO: *Madrid, vivienda y urbanismo, 1900–1960. De la normalización de lo vernáculo al Plan Regional*, Madrid, Akal, 2004, p. 343.

44) “Noticias”, *Centro*, núm. 6, noviembre 1943.

45) 17歳以下を対象としていた。

ではなくより細かく年齢で分けたほうがよいという考えにそって、候補会員を通常の「候補会員」と「前候補会員」とに分割することを決定した⁴⁶⁾。

しかしながら、幹部による教区セントロの活動活性化への要求に応える会員ばかりではなかったのが現実であるようだ。たとえば、1944年には、『セントロ』では、候補会員代表やインストラクターは執行部が提案を繰り返しているのにもかかわらず、皆は反応していないように見える、という記事が掲載された。そのうえで、事態打開のため、6月13日には候補会員の日を祝う計画があるとし、候補会員に行事への参加を強く求めている。また、夏休み中は娯楽の場を提供するとして、卓球やチェスのトーナメント、遠足などを提案し、会員は教区セントロを通じて夏の自由時間を有効に活用するよう促してもいる⁴⁷⁾。

6. 教区セントロの活動理念

こういった教区セントロの活動を支えた理念とは、どのようなものであったのだろうか。たとえば、『セントロ』のなかで会員は兵士にたとえられる。

兵士が自分の祖国のための戦いに召集されるときには、派遣される部隊の記章が渡される。それと同様に、あなたはキリストの軍列で戦うために呼ばれたのだ。あなたには「青年部」の記章が渡され、あなたは旗に描かれた十字架に口づけした。とはいえ、あなたには本当に記章を襟に着ける資格があるのか⁴⁸⁾。

このように、会員のあるべき姿のイメージを創出する上で、現世で戦うキリストの兵士にたとえている。キリストを信じて、その王国の実現のために努力する、目的を同じにする青年たちの集合体であることの自覚を促しているといえよう。

46) “Noticias”, *Centro*, núm. 6, noviembre 1943. 第3回教区セントロ総会で合意された内容である。なお「候補会員」と「前候補会員」の対象年齢は記されていない。

47) “Aspirantes”, *Centro*, núm. 8, junio 1944. しかし、実際に実施されたかどうかに関して、『セントロ』に記述はない。

48) “Insignia”, *Centro*, núm. 2, 31 enero 1942.

私たちは若い友の集まりとしてアクシオン・カトリカ青年部にいるわけではない。私たちの精神を強化し、家族や社会そして世界を再キリスト教化するために「青年部」にいるのだ⁴⁹⁾。

会員には常時精神的な鍛錬が求められていた。夏休みを前に、教区セントロを一時的に離れようとする会員に対し、休暇中でも精神的には休むことなく、キリストを模倣しつづけるよう述べている。

私たちの前に、自分の居場所を要求して、夏がやってきた。常に、この夏という単語を発音するとき、私たちは2つの単語と結びつける：暑さと休暇だ。人類が抵抗なく受け入れるこの2つの類義語についてだが、私たちはそのうちの前者、暑さだけを理解し受け入れる。後者は、キリストの民兵である私たちのあり方からして、受け入れることはできない。私たちのカトリック信徒としての生活には、休暇はない。私たちという存在は、常にキリストに向かって歩み続けるものであり、私たちの巡礼においては、立ちどまるということは、アクシオン・カトリカ青年部という私たちの職にとっての裏切りなのだ。休暇は、仕事で疲弊した体には必要だ。しかし他の創造物と私たちを違うものにする高貴で人間的なバネには、つまり魂には、この世から永遠の命をいただくために去る日のためにだけ、休みがある⁵⁰⁾。

また、外部にみえる形での会員の行動として、スラム街での奉仕活動が念頭におかれていた。

私たちの望みは大きく、だからこそ、私たちの仕事が、——これはキリストに由来する仕事なのだが——、私たちの教区での明らかな現実となるよう、また祖国の再キリスト教化のためのこの決定的な時に、私たちに属しているスラム街の前衛において明らかな現実となるよう、皆さんの協力を求めている⁵¹⁾。

宗教的出版物であることを強調するためか、フランコ將軍を称揚する表現は、

49) Ibid.

50) Juan Bautista DE ARTEAGA: “Vacaciones”, *Centro*, núm. 5, mayo 1943.

51) “Editorial”, *Centro*, núm.1, 24 enero 1942.

機関誌『セントロ』にはまったく見受けられず、また「統一ファランヘ党」のイメージを彷彿とさせるような言説も用いられていない。

この戦争の悲劇的なときのなかでも、私たちの指導者である教皇に祈りと挨拶をささげましょう⁵²⁾。

ここで指導者と訳出した原語は“Caudillo”であり、通常、当時の文脈ではフランコ将軍を示す単語として用いられた。しかし、『セントロ』は、フランコ将軍をさすことばをローマ教皇に読み替えて用い、自分たちの指導者(Caudillo)はあくまでローマ教皇であると暗に主張している。あくまで「青年部」は、政治を超越した人格形成のための組織であることを表明していると考えられるべきでしょう。

7. 教区セントロと内戦の記憶

教区セントロは、内戦で19名の死者を出した⁵³⁾。内戦で死亡した会員への思いの深さは、彼らを「殉教者(Mártires)」と呼び、機関誌『セントロ』全体の1割弱の紙面を彼らのために割いていることから明らかである。こうして『セントロ』は、内戦で死亡した教区セントロ会員のバイオグラフィを折にふれて掲載することで、彼らを「殉教者」として人々に記憶させる事業を継続した。また執行部は、この「殉教者」の家族や教区セントロの保護会員⁵⁴⁾に対して、殉教者の祝日の記念カードを配布することを決議した⁵⁵⁾。

すでに第二共和政末期、人民戦線政府のもとでの政治的闘争のなかで、教区セントロからは死者が出ている。1936年3月には、セントロ正会員のベルソレル・カスティニエイラとオラノ・オリベが共産党員によって発砲され、死亡する事件がおきた。死の床にあって二人とも「アクション・カトリカ青年部の人

52) *Centro*, núm. 4, enero 1943. ここでいう戦争とは第二次世界大戦のことである。

53) Junta Técnica Nacional de la Acción Católica Española: *op. cit.*, p. 727.

54) 寄付などをもって運営に協力する賛助会員の呼び名である。

55) “Noticias”, *Centro*, núm. 2, 31 enero 1942.

間だからやられた」と述べたとされており、彼らは「原殉教者 (Protomártires)」として教区セントロ内で語り継がれていくこととなった⁵⁶⁾。

また『セントロ』における「殉教者の花」と題された内戦における犠牲者の紹介は、「偉大な素質と深い信心に溢れた人物」、ゴンサレス・バレラで始まっている。機関誌『セントロ』第1号は、ゴンサレス・バレラは「職場で逮捕されチェーカー⁵⁷⁾に連行されたが、そこから連れ出され銃殺刑に処された。」と述べる⁵⁸⁾。『セントロ』第4号では、ゴンサレス・バレラは、顔写真入りで登場し、彼がサン・ベルナルド通りの聖母訪問会修道院に設置されたチェーカーに連行されたこと、そこからバレンシア街道に連れ出されて銃殺に処されたのは1936年11月7日だったことなど、より詳細なデータを用いて彼のバイオグラフィが再構築されている。このように、『セントロ』の記述では、彼は繰り返して「殉教者」としてまた「聖者」として、人々に記憶されるべき死者として語られるのである⁵⁹⁾。

他の例を見てみよう。教区セントロ書記だったアバルカ・アクリテロは、マドリード大学法学部の学生として、素晴らしい知性とキリストの理想を求める熱心な戦士だったと評価される。「父親と一緒に逮捕され、ポルリエール監獄に連行されたのち、そこから殉教のために引き出された」とされ、会員は自分の祈りのなかで彼のことを思い出すよう、求められている⁶⁰⁾。

また、モンメネウ・フェレールは、モンタニャ兵営事件における彼の言動と行動によって会員に記憶されることとなった。モンタニャ兵営事件とは、内戦開始直後の1936年7月19日、ファンフル将軍がマドリードにおける反乱軍側の命令系統を確立するためこの兵営に立てこもったのに対して、共和国に忠誠

56) Antonio GARICANO: “Días memorables”, *Centro*, núm. 7, mayo 1944.

57) スペイン内戦における「チェーカー」とは、第二共和国陣営内で主にマドリードやバルセロナなどの大都市に設置された、政治犯など敵を収容する監獄もしくは取り締まりにあたった警察分隊の名称である。François GODICHEAU: *La guerra civil en 250 términos*, Madrid, Alianza Editorial, 2005, pp. 49–50.

58) “Flores de mártires. Pedro González Valera”, *Centro*, núm. 1, 24 enero 1942.

59) “Nuestros mártires. Pedro González Valera”, *Centro*, núm. 4, enero 1943.

60) “Flores de mártires. Emilio Abarca Acritero”, *Centro*, núm. 2, 31 enero 1942.

を誓う治安維持警察や突撃隊などが攻撃を行い、反乱軍側が制圧された、という事件である⁶¹⁾。

『セントロ』では、モンメネウ・フェレールは、次のように描写されている。

アクション・カトリカに属する青年、偉大な祖国を心から求めるスペイン人だったモンメネウ・フェレールは、喜びと犠牲のうちに自分の生命を奉げることができた。

モンタニャ兵營の守護者は、医師として看護士として、闘争にある兄弟たちのために行動した。逮捕され、モデロ刑務所に連行されたが、あの回廊と牢獄のなかで、聖なる平和の香りで人々を覚醒させた。彼を銃殺に処さねばならなかった民兵隊が感心するほどであった。

深遠な宗教的感覚に満ちたことばを、彼は我々に宛てて小さなノートにつづった。

死亡時には「神のために喜んで命を与えた」とも、また「彼はそれ以前に我々のために血を流し苦しみ亡くなった」ともいわれた。

我々の多くが彼の死を嘆き、敵でさえも使徒的な喜びの効果を感じていた。

今月には亡くなってから7度目の記念日が来る。この数行が彼の死を思い起こすことになれば幸いである⁶²⁾。

なお、彼の人生を記した文章は、アクション・カトリカ青年部マドリード司教区評議会が募集した内戦で死亡した「青年部」会員についての人物伝コンクールに三位入選し⁶³⁾、後年、パンフレットとして出版された⁶⁴⁾。

『セントロ』で「殉教者」と分類されるのは、内戦期の死者に留まらない。第二次世界大戦への不参加を表明したフランコは、スペイン内戦での援助の見返りとして枢軸国側に「青い師団」派遣を行った。この義勇兵はドイツ軍の傘下に入り、1941年夏から1943年秋のあいだに、15750名ほどがロシア戦線へ送

61) Ramón GUERRERA DE LA VEGA: *Madrid, 1931–1939. II República y Guerra Civil*, Madrid, Street Art Collection, 2005, p. 30.

62) “Nuestros mártires. Vicente Monmeneu Ferrer”, *Centro*, núm. 6, noviembre 1943.

63) “Noticias”, *Centro*, núm. 7, mayo 1944.

64) José MORATE ZAPATERO: *Vicente Monmeneu Ferrer. Apóstol y mártir de la Cárcel Modelo*, Madrid, 1948.

られた⁶⁵⁾。自分たちの仲間の死を追悼する機関誌『セントロ』は、この「青い師団」に加わり死亡した会員の追悼記事も掲載したのである。以下、その記事を見てみることにしよう。

アルフォンソ・デ・カストロが死んで2ヶ月になる。ラモンとともに兄弟で青い師団に加わり、ロシア戦線で勇ましく戦い、いくつもの傷を受けて入院した。リガではじめの手術を受け、少しずつ回復に向かったため、スペインへ移送された。しかし戦闘のあいだに弱まった若い彼のからだには、もはやどのような治療の努力も役立たなかった。

入院中はどんなときも、彼の美德である忍耐強さが際立った。強い痛みにも苦しみながらも、彼の唇から嘆きもれることはなかった。使徒的な精神も揺らぐことなく、我々が最後に見舞った折には、全てを神にささげキリストのために働くよう我々皆を励ました。

彼の最後の瞬間は、私たちにとって聖性の最もすばらしい例である。彼の思い出は、私たちの魂のなかに常にあり、また彼の名は、私たちの名誉会員として金色の文字で永遠に刻まれ続けることだろう⁶⁶⁾。

「青い師団」は、フランコがロシア戦線のドイツ軍を支援するために「統一ファランヘ党」を用いて召集させた義勇兵団である。しかし『セントロ』によるデ・カストロのバイオグラフィにみられるのは、死者を非党派的な視野から位置づける姿勢である。「統一ファランヘ党」によって、神や祖国のための戦死者を記念するための表現としてよく用いられていた「ここにあり (¡Presente!)」や「戦没者 (Caídos)」といった単語は『セントロ』では見あたらない。

その一方で、以下の文章にみられるように、死亡した会員一人ひとりの死を悼み、神のために自分の生命をささげた仲間を自分たちの宗教的生活上の指針とする意図を読み取ることができる。たとえば、カトリック暦で死者を追悼する時期に合わせて、1943年の11月には次のような表現が見られる。

65) Elena HERNÁNDEZ SANDOICA, “División Azul”, Jaime ALVAR EZQUERRA (ed.): *Diccionario de historia de España*, Madrid, 2001, p. 241.

66) “Nuestros mártires. Alfonso de Castro Porras”, *Centro*, núm. 5, mayo 1943.

若いカトリックとしての君の義務を果たして、今月を私たちの殉教者にさげよう⁶⁷⁾。

フランコ体制初期の教区セントロを動かした思想の根本には、死を覚えるという作業が会員の全人形成につながるようにという願いが常にあった。たとえば次のような記事からは、くり返して自分たちを残して死んでいった会員に思いをはせることで、地上に残されたものとして日常のなかで神に仕えることができると考えられていたことが伺える。

(略) 私たちは祖国の再キリスト教化のための戦いで進軍する民兵である、信仰と愛と希望とを武器にする兵士である、星の澄み切った光のもと、私たちの殉教者の崇高な十字架を正面にし、前衛の場で見守る者である。

(略) 私たちの人生は私たちのうちでも最良の者らが残した航跡をなぞるものである。彼らはもう逝ってしまったけれど、無血の殉教者たちよ、私たちは自分自身の血を一滴一滴流しつつ、魂の征服のための大変な作業と日常のなかでの単調な作業とを通じて、神が私たちに望むように過ごさなければならぬ⁶⁸⁾。

機関誌『セントロ』は、スペイン内戦と第二次世界大戦のロシア戦線というまったく異なる二つの地域、異なる文脈で繰り広げられた戦争で死亡した会員の死を「等価値」なものとして提示する。評価されるのは、あくまで宗教的にすぐれた「殉教者」としての姿である。意識的に「統一ファランヘ党」が用いた死者への追悼表現を用いないことで、「青年部」は組織としては「統一ファランヘ党」とは別のものであることを暗に主張する、意図的な言説コントロールであるといえる。

67) “Sacrificio”, *Centro*, núm. 6, noviembre 1943.

68) José MORATE: “Nuestra Misión”, *Centro*, núm. 4, enero 1943.

おわりに

内戦後、カトリック教会は、フランコ独裁体制の安定化に協力するいっぽうで、自分たちの自立性を希求し続けた。カトリック運動全体のなかでも、組合運動的な組織活動を展開していた団体は解散を余儀なくされ、結果として「統一ファランヘ党」へ吸収された⁶⁹⁾。しかし、教会が運営する信仰を育成するための組織であったアクション・カトリカ男性部、女性部、青年部、女子部の4部門は、「統一ファランヘ党」への統合を免れ、信仰心をのばすことに特化した団体として自立を許された。その背後には、いったい誰が「新国家」を支える支柱となる若い世代の全人教育にあたるのは誰かをめぐって葛藤が生まれていた。教会は教会で、「統一ファランヘ党」は「統一ファランヘ党」で、自分たちが青年層の育成母体となるべきであるとしてライバル意識を強めていった。

ここでスペインにおけるアクション・カトリカの組織全般が、内戦後に改編されていることに触れておきたい。アクション・カトリカは1939年に示された新たな基本方針によって、組織の中央集権化を進め、信徒の聖職者ヒエラルキーへの従属を強めようとした。そのような状況下で、特に「新国家」の未来を背負う青年たちを指導する役割をになった聖職者のなかには、「統一ファランヘ党」と協調する姿勢を前面に打ち出したものもいれば⁷⁰⁾、ともすれば「統一ファランヘ党」に敵愾心を抱くものもあった。1940年に死亡したゴマ枢機卿の後任として、1941年10月にプラ・イ・ダニエル枢機卿がトレード首座大司教が着座してからは、「統一ファランヘ党」と教会とのあいだでのコンフリクトの存在が明確になった⁷¹⁾。聖職者のなかでも、対応をめぐって意見が分かれてい

69) たとえば、スペイン労働者組合連合 (CESO) やカトリック全国農業連合 (CNCA) は、垂直組合に統合されている。解散や統合のスピードは、組織によって異なる。詳細については以下を参照されたい。Juan José CASTILLO: *Proprietarios muy pobres. Sobre la subordinación política del pequeño campesino en España. (La Confederación Nacional Católico-Agraria, 1917-1942)*, Madrid, Servicio de Publicaciones Agrarias, 1979, pp. 393-444.

70) 当時のマドリード司教、エイホ・イ・ガライなどがその典型例である。

71) Feliciano MONTERO GARCÍA: “La Acción Católica Española en el primer franquismo, 1939-1951”, IV Encuentro de Investigadores del franquismo, (Valencia, 17, 18 y 19 de noviembre de 1999. Recuperado de Internet. (<https://ebuah.uah.es/dspace/>

たのである。

コルプス・クリスティ教区セントロの再建は、まさにこのような、「統一ファランヘ党」と教会との間の「権力闘争」が広がりを見せていたころにおきたできごとであった。内戦以前から、教区セントロに属する「よき平信徒」のなかにはすでに黨員であったものもあり、戦後も、両方の組織で活動する青年たちが多かったと考えられるため、政治と宗教のあいだの線引きは、個人の活動のレベルでは困難であったはずである⁷²⁾。しかし、教区セントロは、教皇を崇める立場を鮮明にしていた。あくまでもアクション・カトリカ青年部のなかの教区セントロとして、「統一ファランヘ党」と一線を画そうとする。少なくとも機関誌『セントロ』のなかでは注意深く同一視されないよう配慮されている。

機関誌『セントロ』の発行状況を見ると、フランコ体制初期におけるコルプス・クリスティ教区セントロの活動は、良好に推移していたとはいえない。その発行が不定期であること、印刷方法が時によって異なること、などは、人員不足、資金不足、そして組織建て直しに関するストラテジー不足を連想させて余りあるものである。

教区教会堂の建造物自体が「暫定的」であったこともあり、教区セントロとして活動できる場所自体もなかなか定まらなかったことは、教区セントロの内戦後の活動を限定したであろう。ナシオナル・カトリシスモのもとでのマドリード市街地の復興事業とともに、教会堂にも変化は及び、クラレチアン宣教会に新たな聖域、新たな教区が与えられたことによって、コルプス・クリスティ教区における教区セントロは、漸進的に活動を縮小していったと思われるが、この点について明らかにするには、新たな資料を見いだす必要があるだろう。

[bitstream/handle/10017/8837/Acci%C3%B3n%20Cat%C3%B3lica%20Franquismo.pdf?sequence=1&isAllowed=y](https://www.ub.edu/bitstream/handle/10017/8837/Acci%C3%B3n%20Cat%C3%B3lica%20Franquismo.pdf?sequence=1&isAllowed=y)

72) たとえば「青い師団」に加わった青年たちはファランヘ党に取り込まれるのと同時にアクション・カトリカ青年部の会員でもある、ということは頻繁におこっていた。また、たとえばサンチェス・ベリャ、ドミンゲス・イスメルといった、フランコ体制初期のころのアクション・カトリカ青年部の全国幹部のなかにも、この2つの団体両方に積極的に関与していた人物もいる。A. LAZO DIAZ, *op. cit.*, pp. 54–55.